
僕とバカとFクラス

惰眠こそ至上

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕とバカとFクラス

【Nコード】

N8090W

【作者名】

惰眠こそ至上

【あらすじ】

Fクラスにはいることになった主人公は地味で普通な一般人？
そんな主人公はFクラスに溶け込めるのか？

まあ、そんなこんなで明久達とバカで楽しい生活が始まる。

ヒロインは未定です。霧島、姫路、美波以外であれば、要望があれば
そのようにしたいです。

プロローグ（前書き）

どうも、初の二時創作です。並列投稿なので、週1ペースになりそうですねですが出来れば読んで行ってください。主人公をこれからどうするかは未定です。地味に活躍はして行きます。（もしかしたら派手になるかも?）

作者はムツツリーニ大好きです。出番を増やせるかわかりませんが・
・
・
・

プロローグ

こんにちは、僕の名前は吉田守よしだまもる今日から文月学園の2年生。

それはいいんだけど・・・・・・・・僕が今立っているのはFクラスの
の前、憂鬱だ・・・・・・・・orz

そもそも、ここ、文月学園は最新鋭の試験校のため、かなり厳しい
制度がある。

それは、『振り分け試験』と呼ばれる。1年の最後に行われる試験
で、その結果により、クラスが決まる。そう、即ち完全な実力主義
ということだ。成績の良いものにはそれ相応の設備を与え、その逆
もまたしかり。そして、Aクラスが最高でFクラスが最低とされて
いる。

僕？僕はそんなによくもなければ悪くもない、普通だ。Cクラス相当だと思う。

ではなぜFクラスの前にいるのか、それは・・・・・・・・・・

何とも情けないが、試験当日に風邪をひいてしまったからだ。

おかげでテストは0点、Fクラスへと決まった。

「ふう・・・・・・・・鬱だ・・・・・・・・死にたいorz」

Fクラスはやっぱりバカしかいないだろうし、ちゃんとやっていくかな？

不安だ・・・・・・・・けど、そろそろ入らないと遅刻しそうだしなあ
・・・・・・・・

その時廊下の向こうからかけてくる影を見つけた。

「わあああああ！！ちっ、遅刻する！！」

その男の子は僕と同じ、Fクラスの前で立ち止まった。そして僕を認識したのか

「あれ？君もFクラス？僕は吉井明久よろしくね。」

「僕は吉田守です。よろしく。」

「それじゃあ早く入ろうよ、遅刻しちゃうよ？」

「そうですね、それじゃ行きましょう。」

そうだ、いまさはどうしようもないんだから、ここでするだけ楽しもう。

そう決意して僕はFクラスの扉に手をかけた。そして吉井くんと共に中に入る。

「すいません、遅くなりました。」

「すいませくん。ちょっと遅れちゃいました」

「さっさと座れ！！このうじ虫野郎！！」

何なんでしょう、入るなり今後友好的な関係を結べる可能性が薄そ

うな罵倒を浴びせられましたよ？

というよりも誰なんでしょうか、彼。先生ではなさそうですが・・・

「あれ？雄二、教壇なんかで何やってるの？」

どうやら吉井君の知り合いで、名前は雄二というらしいですね。下の名前で呼ぶなんて、仲のいい友達同士なんですね。

「おう、明久か。なに、先生が遅れていてな、代わりに上がってみた。というより、お前の隣の奴は？」

「ああ、吉田君だよ、同じFクラスなんだ。」

「そうか、吉田、さっきはすまなかったな。あの罵倒は明久のためだけのものだったんだが・・・」

「雄二、僕に謝罪はないのかい？」

「さっきも言ったら、明久。さっきのは親友としてお前のためだけの・・・・・・・・罵倒だ。」

「違う！そもそも、親友に対してまず罵倒することはない！！」

「だから、明久。お前は俺にとって特別なんだ。お前を見ると・・・・・・・・無性にイライラする。」

「それは特別の意味が違う！！それを人は敵意と言うんだよ！」

「おお、明久！ちゃんと敵意の意味が分かるのか！？」

訂正・・・ほんとにこの2人は友達なんでしょうか？完全に敵同士のような気がするんですが・・・

こうして、僕のあわただしく、楽しいFクラス生活が始まった。

プロローグ（後書き）

ということで、「僕とバカとFクラス」でした。

まだまだ駄文ですが、付き合っていただければ幸いです。

感想、指摘などお待ちしています。

多分、作者は泣くほど喜ぶんで。

第二話く僕と変人と自己紹介く（前書き）

どうも、惰眠貪ってる作者です。

休日ということで、昼夜に分けて投稿してみました。

多分最初の頃だけになりそうですが。

もう1作並列投稿してますが、こっちは書きやすいです。

やっぱり原作知ってるからかな？

それではどうぞ読んでいって下さい。

第二話く僕と変人と自己紹介く

ふう……やっと二人のいがみ合いが終わりましたよ……
まあ、まだ睨み合ってはいますが……

「はい、そこで立っている人たち。席について下さい。」

おっと、担任の先生が来たようですね、見た目は完全に冴えないおじさんですが……

「失礼した、先生。ほら、行くぞ明久と……誰だ？」

そういえば、あの怒涛の言い合いで自己紹介を忘れていました。

「僕の名前は……『まあいい、どうせ後で自己紹介があるだろう。』
……そうですね……」

いえ、別に悲しいとか遮られて残念とかソナコトナイデスヨ？ホントデスヨ？

「あ！あの後ろの方空いてるよ。あそこにしようよ。」

そう言って席にむかう吉井くん。

というより、今気づきましたが、本当に設備がひどいですね！！

座布団にちゃぶ台という装備もさることながら、座布団の綿はほとんどなく、ちゃぶ台もボロボロです。

教室中に蜘蛛の巣があるし、窓もガラスが無い所が多々見られます。

まあ、Fクラスだし、仕方ない。そう割り切り、席に座ると先生が喋り始めました。

「えー皆さん、進級おめでとうございます。私はFクラスの担任のふくはらしん福原慎です。よろしくおねがいます。」

とても地味な先生ですが、このFクラスの中で一番常識人っぽい。かなり、親近感を覚えました。

「それでは、皆さん自己紹介をしてもらいましょうか。窓際の方からお願いします。」

そういうと、皆さん自己紹介を始めました。さすがにFクラスといえど、そこまで変な人はいないみたいですね。よかったです。

「ふむ、次はわしの番か。」

わし？ 奇妙な言葉遣いですね。誰でしょうか？

そうおもしろい、声の方へ顔を向けると・・・・・・・・

「わしは木下秀吉きのしたひでよし じゃ。演劇部に所属しておる。よろしくたのむぞい。」

絶世の美女といっても差し支えない子が。ただ、制服は男もの。

（男装が趣味なのか？やっぱりFクラスだなあ）

「ちなみに言うておくと、わしは男じゃぞ？」

「「「「「な、なにいいいいいいい！！」「」「」「」

Fクラス男子ほぼ全員による魂のシャウト。僕もその中の一人。

ただ、吉井くん達は反応がなかったから、知ってたのかな？

さて、まだショックは残ってるが次の人だ。

「俺は須川亮趣味とかはあまりないが、リア充を殺S・・・じゃない、正しき道に導くのが使命だ。」

そんな俺の思想に賛同するもの達よ！！俺が創るFFF団に入れ！！そして愛を手に入れ、狂ったリア充共に正義の鉄槌を！！」

「「「「「うおおおおおおお！！！！」」」」」

今度は今度でFクラス男子全ての魂のシャウト。

もういや・・・・・・帰りたい。

沈んでいる間に結構進んだようです。次のひとは・・・・・・・・静かそうな小柄な男の子。

「土屋康太^{つちやこうた}・・・・・・・・よろしく。」

うん、やはり静かなひとのようです。良かった。

「特技は盗さ・・・・・・・・特に無い。趣味は盗ちよ・・・・・・・・
特に無い。」

うん。あのポケットからはみ出してるレコーダーやカメラは違うよね？ただ、写真撮ったりするのが趣味なだけ！！
そう、そうに決まってる！！

さて、あまりのショックで他のひとの話をほとんど聞いてませんでした

「・・・です。育ちは外国で日本語は話すのは大丈夫だけど、読み書きはまだ苦手です。」

お？女子の声だ。っていうか初めてじゃないか？どんだけ男子ばかりなんだ・・・Fクラス・・・

「趣味は吉井明久を殴ることです☆」

「あはは、冗談がうまいな〜ねえ？吉井くん？」
((((; 。 D 。))))) (ガクガクブルブルガクガクブルブル)

吉井・・・くん？なぜそんなに震えているの？島田さん（名前いつてた）の話が終わった頃から・・・

まさか、さっきの話が本当なわけない・・・よね？

もう気にし無いようにしよう。僕自身のためにも。

おっと、吉井君の番だ。ガクブル状態からは抜け出したみたい・・・
 ...良かった・・・

「吉井明久です☆気軽に『ダーリン』って呼んでください☆」

うん。ちよつと面白くてとっつきやすい人って印象を受ける。なかなかいい自己紹介だ。

[illegible]

「失礼、忘れてください……」

若干青ざめながら座る吉井君。仕方がない、何せ野太い男の声で大合唱されたしな……

それにしても、実際に言うなんて・・・・・・・・やっぱり、Fクラスだな・・・・・・・・

さて、これで最後、吉井君の友達（？）の番だ。彼は壇上にゆっくりとした足取りで上がっていき・・・・

ガラッ

その時、教室のドアが開いた。そして、そこにいたのは学園トップクラスの才女と言われる姫路瑞希さんだった。

（なぜ彼女がここに？）

おそらくみな思ったであろうことを一人の男子生徒が代弁した。

「な、何でここにいるんですか？」

「そ、その試験のとき熱を出してしまっただけ……」

なんと！！僕と同じ理由とは、高嶺の花とはいえ親近感がわくなあ。

そんな僕をしり目に、みんながしゃべる、しゃべる。

「そうそう、俺も物理のとき熱（の問題）がでたFクラスに……」

「俺は弟が病気と聞いて気が気じゃなくて……」

「黙れ一人っ子。」

「前の晩彼女が寝かせてくれなくて……」

「「「「判決、死刑！！！！！！」」」」」

「まったく！ジョークだって！ほんのジョーク……ぎゃあああ
ああああああ！！！」

あれ！？1箇所原作と違う！？

【メタはダメだよ。それにこっちのほうがFFF団っぽいでしょ☆】
違うと言い切れない………はっ、っていうか今の声誰？

ま、いいや。気にしたら終わりそうな気がするし。

「ということで、ひ、姫路瑞希です。よろしくお願いします。」

うんうん、楽しくなりそうだ……。向こうのほうでさっき
まで聞こえていた叫び声が消えたのは気にしないでおう……。・
・・

ということで、中断されていたが、彼の番だ。彼がここのクラス代
表らしい。

僕？僕は終わってますよ？もちろんふっつの自己紹介でしたが、
逆に変な目で見られましたよ……。普通がそんなに悪いか
！！

「みんな、おれがクラス代表の坂本雄二さかもとゆうじだ。さて、まず皆に聞こう。
」

そういつて部屋の設備をゆっくりと眺めていく坂本君。それにつら
れるクラスメイト達……。うまい。

少し時間をおいて、一言。

「不満はないか？」

その途端、静まり返るクラスメイト達。そして口々にしゃべりだす。

「どうせ、俺たちなんかじゃ・・・」

「それに負けたら補習だし・・・」

「姫路さんさえいれば何もいらないう・・・」

最後のは違うような気がする。

「安心しろ、勝ち目のない戦などしない。理由を教えてやろう。」

そう言って坂本君はさっきの小柄な男子を呼んだ。

「オイ、ムツツリーニ。いつまでも姫路のスカートを覗いてないで来い。」

「ブンブンブンブン！！」

顔を地面に着けてまで覗き込むとは・・・さらに、そこまで証拠が残っていてなお否定するとは・・・

「こいつがあ有名な『ムツツリーニ』だ」

文月学園の美女・美少女の写真を取り扱っているといわれるムツツリ商会の主か！！

まさか・・・こんな所にいようとは・・・あれ？
すごく納得がいくんだけど？

「それに、木下秀吉。」

「わ、わしもか？」

「演劇部のホープ……」

「あいつの姉ってあの木下優子だろ？もしかしたら……」

「姫路瑞希。」

「彼女はAクラス並みの戦力だもんな!!」

「ふえっ？わ、私もですか？」

「それに俺も全力を尽くす。」

「坂本って昔『神童』って呼ばれてたらしいぜ。」

「マジか。じゃあAクラス並みが2人もいるってことか。それなら……」

おお、みんなの士気が上がっていく……計算済みか？スゴイ人だな坂本君は。

「それに吉井明久だっている。」

シーーーーー

「ちょっと!! 雄二何でそこで僕? せっかく士気が上がったのに………って何で僕をにらむのさ!!」

「誰だ? 吉井って?」

「知らん、でも誰も知らんってことはカスなんじゃ?」

「ふっ、知らないなら教えてやろう………こいつは………
吉井明久は………」

『観察処分者だ!!』

第二話く僕と変人と自己紹介く（後書き）

さて、どうでしたでしょうか。

主人公のキャラがあまり定まってません。

ダメな作者ですが、今後もおつきあいしていただければ幸いです。

感想・アドバイス・評価などお待ちしております。

作者に生きる糧を……………

ではまた次回。

第3話く僕と悪魔と召喚戦争（前書き）

どうも、第3話です。やっぱりこっちのほうを書きやすいですね・・・

最近体育祭が近づいてるので学校が忙しいです。
ある意味息抜きになってますねく
では本編です。

第3話 く僕と悪魔と召喚戦争

「『観察処分者』……………ですって？……………それって……………」

バカの代名詞だったような気がするんですが……………」

「ち、違うヨ？これはちよつとおちゃめな高校生に付けられるだけで……………」
「そうだ。バカの代名詞だ。」肯定するな！！バカ雄二！！」

そういえば、風の噂でこの学年に一人『観察処分者』がいると聞い

たことがあるが……まさか吉井君とは……

「『観察処分者』って何なんですか？」

おっと、姫路さんは知らないようだ。まあ、仕方ない。姫路さんは聞くことのない単語だからな。そんな姫路さんに坂本君が説明する。

「ああ、姫路は知らなくても無理ないな。『観察処分者』ってのは、学校側から監視が必要だといわれる程素行も学業も悪い奴に与えられる、まさに選ばれた者にしかもらえない称号だ。」

「へー、すごいんですね！」

「姫路さん！？今の説明ですごいと思える要素はないと思うよ！？」

思わず口を出してしまった。というより姫路さん、あれは天然なのか……？

おっと、坂本君の説明はまだ続いてるようだ。

「が、利点もある。『観察処分者』の召喚獣は教師と同じで物に触ることができる。それで教師の手伝いをするのが仕事だな。」

「やっぱり凄いですね！吉井君！」

「い、いや、そんなに良い物じゃないよ。確かに物には触れるけど、その分疲労や痛みが少しフィードバックされるんだ。」

なるほど、確かにそうでもしないと罰にならないからな。

「待てよ？てことは戦争中にダーリンは『その呼び方はやめて!!』・・・わかった。吉井は簡単に召喚できないんじゃない？」

疑問を口にするA（ゴメン、名前覚えてねえや。）

それに対し悠々と受け答える坂本君。

「気にするな。所詮いてもいなくても変わらんような『雑魚』だ。」

「雄二、そこは僕をフォローするところだね？っていうか！そんなに雑魚を強調するな!!」

「フン、雑魚に変わりないだろうが。明久。」

「いったな、雄二。今そんな考えが間違っていることを教えてやる・・・」

「ほう？やれるもんならやってみやがれ。」

「言ったな!!このバカ雄二!!!」

そういつてまたもドッグファイトに突入する2人。あの二人はどういう関係なんだろう・・・うまく言えない・・・誰かわかる人がいたら教えてください。

「明久、雄二落ち着くのじゃ、今は召喚戦争の話じゃろう？」

場を収める木下さ・・・くん。GJ!!

「ふん、今日は引いてやろう、良かったな明久。」

「そっちこそ、無様な姿をさらさなくてよかったね、雄二」

「ぐぬぬぬぬぬぬ」

二人はほんとに何なんでしょうね？

「とまあ、今のはジョークだ明久、はっはっは。」

「なんだ、そうだったの？早く言ってよ雄二。本気で殺意を持つとこだったよ」

「本気で殺意を持つ相手を友人とは言わんと思うのじゃが……」

奇遇ですね。僕もそう思いますよ木下……くん

「というわけで、だ。皆、まずはDクラスを攻めようと思う。」

「なんでDクラス？僕らの目的はAクラスでしょ？」

「いいか？明久、どう頑張っても、うちの戦力じゃAクラスには勝てない。」

自信満々な坂本君にしては弱気な発言ですね。

「が、勝てないわけじゃない。」

「雄二よそれは矛盾しておるぞ。」

「違う。勝てないのは真っ向から勝負すればって話だ。勝てる土俵に持ち込む。Dクラス戦はそのための布石だ。」

「というわけで明久、戦争開始の『死者』としてDクラスに宣戦布告して来い。」

「なんか、使者の文字が違ってるような・・・」

「気のせいだろう。」

「そっか、でもこういう使者って大概ひどい目に会うんじゃない・・・」

「大丈夫だ、明久。俺が保証してやる。おれが危険なところにわざわざ友を送ると思うか？」

「・・・うん、そうだね！！行ってくる！！」

そういつて吉井君は飛び出していきました・・・が、僕は見ました。

その吉井君を見ていた坂本君の口が一瞬、ほんの一瞬だけ邪悪に歪むのを……

「騙されたあっ!!!!」

吉井君が帰ってきました。全身ボロボロで……

「雄二! 全然大丈夫じゃなかったよ? あっちの人たち宣戦布告した途端つかみかかってきたよ!!!」?

「ふむ、やはりそう来たか。」

「くきいいいいい!! 殺す! 殺しきる!!」

「落ち着け『ぐぼあっ!!』・・・まったく、後で作戦会議だ屋上に来い。」

殴り掛かってきた吉井君に躊躇なく鳩尾に拳を叩き込んだ坂本君。しかも悪びれもしてない。

悪魔だ・・・悪魔がいる。

「つと、そうだ。お前も来い。吉田。」

「ええ? ぼ、僕ですか? 何で...?」

「イ・イ・ナ?」

が、僕はNOと言える日本人。

「はい!!!」

うむ、我ながらい返事だ・・・

こうして、僕は初日から召喚戦争をすることになった。

っ
て
い
う
か
何
で
僕
は
目
を
つ
け
ら
れ
た
ん
だ
ろ
う
・
・
・
・
・
・
?

第3話く僕と悪魔と召喚戦争（後書き）

どうでしたでしょうか。細部はすこしだけ変えています。

ヒロインが・・・ヒロインが決まらないッ！！

まだ誰にしようか悩んでいます。要望があれば作者のできる範囲でかなえようとは思いますが、ある方はぜひ。

あと、3，4話中にはヒロインを決定、複数か一人かも決めようと思います。

今回も付き合っていたいただきありがとうございました。

感想・評価・アドバイスなど作者は心よりお待ちしております。

ではまた次回で。

第4話く僕と皆とミーティングく（前書き）

お久しぶりです。

作者が降臨しました。嘘です。偉そうなこと言って申し訳ありません。

今回で主人公の能力（？）を出そうと思ったんですが二話に分けて投稿することにしました。後半では判明する予定です。

では本編を・・・どうぞく

第4話く僕と皆とミーティングく

さて、ミーティングだ。坂本君に呼ばれたし行かないと。そういえば、吉井君は？さっき殴られてたけど・・・

「ほくら、吉井あんたも行くの。」

よかった、島田さんが連れて行くようだ。

「へいへい。」

「返事は一回！」

「へい。」

「まったく。一度Das Brechen・・・ええと、日本語だと・・・」

「・・・調教。」

「「うわっ!!（キャッ!!）」」

「・・・ってムツツリーニか。ビックリさせないでよ。っていうか調教なんてドイツ語よく知ってるね。」

「・・・一般教養。」

土屋君・・・いや、ムツツリーニの一般教養とはどんなものなんだろう？

普通でないことは確かだな、うん。

「そういうことで調教の必要性がありそうね。」

「どういうことか全くわからないよ島田さん!!それに調教じゃないくて、別の言い方があるでしょ?」

「別の? うーん……………折檻?」

「余計酷くなったよ!!」

このやり取りを見て僕は島田さんの自己紹介があながち間違っていないことを確信した。

「っていうか、ムツツリーニ。相変わらず性の知識はずば抜けてるね。」

「……………! (ブンブンブン)」

「いやいや、いまさら無理があると思うよ?」

「……………!! (ブンブンブン)」

「ほら、さっき姫路さんのスカート覗いてた跡、まだついてるよ?」

「……………!! (ブンブンブン)」

「そこまで証拠がそろってても否定できるのは凄いと思う。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・!!!!!!」(ブンブンブンブン)

「・・・・・・・・何色だった？」

「水色。」

「「即答かよ!!!!!!」」

はっ、しまった。ついつい突っ込んでしまった。それにしても・・・
・・・さすがはムツツリーニ、その異名は伊達じゃないぜ。

「そろそろ行きましょ？お昼も食べなくなるわよ？」

そうだった。呼び出されてるし、早く行かないと。

晴れ渡った空に太陽がまぶしい。屋上に来るともう主要人物は揃っていた。

坂本君が口火を切る。

「明久、宣戦布告はちゃんとしたよな？」

「うん、今日の午後に開戦って言っただけ。」

「それじゃ、ウチらはまず昼ごはんってことよね？」

「ああ、そういうことだ。」

そして、各々弁当やパンを取り出していく。・・・吉井君以外。

「明久、今日ぐらいまともな物を食べろよ。」

「そう思うんだったら少しくらい恵んでくれてもいいと思うんだけど・・・」

「えっ？ 吉井君はお昼を食べない人なんですか？」

姫路さんは驚いたように吉井君を見ている。僕も同感だ。成長期のこの体に昼抜きはさすがにキツイ。

「いや、一応食べてるよ。」

言いつつも目をそらす吉井君。

「あれは食べてると言えるのか？」

坂本君が横やりを入れる。

「どういふことさ、雄二。」

「いや、お前の主食って・・・・・・・・・・水と塩だろう？」

哀れむような・・・・・・・・いや、哀れんだ言い方だ。

「失礼な！！きちんと砂糖と油も食べているさ！！！」

「吉井君・・・・・・・・それは食べると言わないんじゃないあ・・・・・・・・」

「舐める、が正解じゃろうな。」

皆が哀れんだ視線を吉井君に向けている。

「ま、飯代まで遊びに使うお前が悪いな。」

「し、仕送りが少ないんだよ！」

ということは一人暮らしか・・・・・・・・大丈夫かな。部屋で死んでそうだけど。

姫路さんが口を開いた。

「あ、あの……よかったらお弁当作ってきましようか？」

「あー！？」

「ほ、本当にいいの？」

「は、はい！明日の昼でよければ……」

「やったー！！ありがとう姫路さん。塩と砂糖以外のものなんて久しぶりだよ！！」

「良かったな、明久。手作り弁当だなんて。」

「うん！！」

「……ふーん、瑞希って優しいのね。吉井だけに作った来るなんて。」

何やら棘が含まれてるな……。ああ、なるほど、そういうことか。大変だな島田さんも。

「あ、いえ！良かったら皆さんにも……」

「俺たちにも？いいのか？」

「それは楽しみじゃのう。」

「……（コクコク）」

「……お手並み拝見ね……」

「えっと・・・僕も含まれるの・・・かな？」

「はい、吉田君もぜひ。」

「それじゃあ。ありがとうございます。」

「やっぱり、姫路さんは優しいね。」

「そ、そんな・・・」

「今だから言うけど僕初めて見たときから君のこと好き・・・『おい明久。今振られたら弁当の話はなくなるぞ。』にしたいと思ってました！！」

「・・・まさかのカミングアウト。吉井君？そんな『僕うまく回避しました。』的なキメ顔してるところ悪いんですが・・・」

「明久よ、それでは欲望をカミングアウトしたただの変態じゃぞ？」

「・・・クスン・・・べ、別にセリフとられて悲しいとかそんなんじゃないんだからねっ！！」

失礼しました。

「明久、お前は時々俺の想像を超える男になるな・・・」

「だって、お弁当が・・・・・・・・」

「まあいい、試召戦争に戻ろう。」

そうだった。そのためのミーティングだった。

「雄二よ、どうしてDクラスなんじゃ？普通は一つ上のEクラスじゃと思うんじゃないか。」

「ああ、Eクラスなんて戦うまでもないからな。ま、色々理由はあるが。その中の一つ、俺もわかってないことがある。未知数なものかな。」

「未知数な物？何じゃ？」

「それはな・・・・・・・・吉田、お前だ。」

「えっ？ぼ、僕ですか？」

「ああ、お前だよ。」

そういつて坂本君はこっちに歩いてきてそのまま・・・・・・・・拳をふるった。

「「雄二！？」（坂本！？／坂本君！？）」「」」

が、僕はそれを予測していたため難なく避けた。

「ほう・・・・・・・・やはり避けるか・・・・・・・・かなり本気で殴りに行ったんだがな。」

「やはりってどういうことですか？坂本君。」

「雄二でいい。……お前、何か隠してるだろ。」

ギクッ

「そ、そんなことアリマセンヨ、ホントデスヨ？」

「吉田君が何を隠してるの？」

「ん？明久か、わからん。」

「「「わかんないの（ですか）？」」「」」

「だから白状してもらおうのさ……。なあ？吉田？」

お父さん、お母さん。守はただいま絶賛ピンチ中です。助けてください。

第4話く僕と皆とミーティングく（後書き）

どうでしたでしょうか。

さて、ヒロインの件ですが秀吉は入れようと思っています。

あと、数話は余裕があるので希望がある方は是非。

感想・アドバイス・評価もお待ちします。

第5話く僕と皆とミーティングく後編（前書き）

お久しぶりです。作者が帰ってきたよー！……すいませ
ん、ふざけました。

連続投稿です。キツイです。連続で投稿してる人って本当に何者な
んでしょうかね？

ともかく、本編をどうぞ

第5話く僕と皆とミーティングく後編

さて、今僕の目の前にはさっさと吐けと言わんばかりの坂m・・・いや、雄二。他の人も僕が何を隠しているのかと興味津々のようだ。

「「「さ、吐け（吐きなさい／吐いて下さい／吐くのじゃ）。」」」」

「ぼ、僕はそんな脅しには屈しませんからね!!」

「そろそろ口調も元に戻したらどうだ、守。」

「・・・・!!ばれてたか・・・・」

「あたりまえだ、俺を誰だと思ってやがる。」

はあ、仕方ないかな。まあ、いつかはばれるもんだし。というより雄二がそれを調べるために手段を選ばなさそうだからな。

「はあ、OK OK白状するよ。説明するのは難しいがな。」

「いいから話せ。」

「・・・・坂本雄二。身長183cm体重72キロ、スリーサイズは上から82・68・84。50メートルのタイムはおそらく6.5秒、垂直跳びは75センチってところか・・・・筋肉の付き方からしてやっているのはボクシング、スタイルはそこその打撃力と相手を冷静に見きわめる観察眼をもとに、正確に相手の急所に打撃を叩き込むようなタイプだろう。それに、ボクシングだけじゃなく

ケンカで培ったものも応用しているはずだ。素晴らしい体だ、よく鍛えこまれている。」

「まさか、ここまでとはな……。すべて正解だ。スリーサイズは測ったことないからわからんが記録やボクシングに関してはパーフェクトだ。」

「すごい！！ねえねえ、僕も視てみてよ！あ、僕は明久でいいよ。」

「わかった、明久。……。吉井明久。身長172cm体重57キロ、上から73・58・76。50メートルは6.4秒、垂直跳び73センチだな……。スポーツや武術をやってないにしろはかなり引き締まってるな……。まあ、食生活のせいもあると思うが。というより、食生活さえ改善すれば素晴らしい選手に……。フフフフフフ……。フフフフフフ……。フフフフフフ……。」

「お、おおい、守？」

「ハッ！？す、すまん。まあ、そんなとこだ。他には？」

「……。女子のデータも、わかる？」

「ムツツリーニか……。もちろん分かるぞ？それがどうしたんだ？」

「視れば、誰でも？」

「誰でも。」

「……。パッドの場合。」

「そんなもの見抜けるに決まっているだろう。」

「・・・・・・・・・・トップとアンダーの差。」

「右に同じ。」

「・・・・・・・・・・無念っ!!!」

そういうとムツツリーニは地面を叩いて悔しがっていた。・・・・・・・・
どうしたんだ？

「どうしたの？ムツツリーニ。」

「ああ、明久か丁度いい。ムツツリーニはどうしたんだ？」

「・・・・・・・・・・俺が測れるのはサイズだけ・・・・・・・・細かい
サイズは無理。・・・・・・・・こんなに俺より上の存在がいたな
んて・・・・・・・・」

「な、なんだって!! 守はムツツリーニより測定力があるのか!!」

「・・・・・・・・・・悔しい。」

「そうそう、守。お前、俺のパンチを躲したのはどうやったんだ？」

「ん？あれか？あれもこれの応用だ。要は観察したのさお前の筋肉
の動きや目線、呼吸やその他もろもろで予想じゃない、予測をする
んだ。」

「やはり、俺の予想通り化け物だったな、お前。」

「な！？その発言はどうかと思うぞ。俺はいたって普通だ。なあ、皆！！」

皆、サッと目をそらした。

「そ、そんな……俺は普通じゃなかったってのか。」

「気づいて無かったことが驚きじゃのう。」

まさか、俺は化け物だったなんて……そうショックを受けている俺に雄二が歩み寄ってきた。

「あきらめろ、守。Fクラスにいるんだ。常人なんて一人もいない。」

「そうか、そうだな。Fクラスだもんな。」

「そういうことだ。」

俺は納得して皆に向き合った。すると、島田と姫路がこちらを睨んでいる。

「どうしたんだ？二人とも。」

「吉田……身長体重にスリーサイズまで見ただけで分かるってどういうことよ！！！」

「そ、そうです！！プライバシーの侵害です！……最近ちょっぴり太っちゃいましたし……」

「ああ、そのことか。大丈夫。俺は他言しないから。プライバシーについてはすまん。昔からの癖だな」

「守は何でそんな能力がついたの？」

「遺伝じゃねえか？」

「遺伝？」

「そ、俺の両親は世界的に有名なスポーツトレーナーらしくてな。今も世界中飛び回ってトップアスリート達を見てるんじゃないか？」

「そんなにスゴイ人たちなんだ……」

「どうなんだろうな。俺からしたらただのうざい親ばかりだが……」

「トップアスリートってたとえば誰よ？」

「んー、確かかなり前に柔道のYAWORAちゃんを見てたような……」

「何！？あの日本を代表する女性柔道家の！？」

「たぶん。最近はお○トだったかな……フライングしたことをかなり怒ってた。」

「ほんとに吉田君のご両親はすごいんですねー」

「ま、そんなもんだ。それで親にガキの頃からつき合わされて気づけばこんな能力が身に着いた。」

「ふむ、となるとお前は防衛線や心理戦で無類の強さを発揮しそうだな。」

「ああ、確かにポーカーとかでそこまで負けた記憶がないな。」

「ポーカーフェイスは秀吉といい勝負じゃない？」

「何を言っておるのじゃ明久。わしは常に自然体じゃぞ。」

「確かにスゴイポーカーフェイスだな。俺でも見抜くのが難しかったぜ。……。それは別なんだが、木下は『秀吉でいいぞい。』……。秀吉は本当に何なんだ？ 男か女かの根本的なところが分からない。」

「何言ってるのさ、守。女の子に決まってるじゃないか!!」

「何を言っておるのじゃ明久!! わしは……。『なるほど、やっぱり男装趣味なだけだったか。いや、すまん秀吉。』……。だから違うのじゃー!!」

「そう考えると『だから僕は男じゃと……。!!』 Fクラスは女子の人数こそ少ないものの質が高くていいもんだな。『もう良い……。はあ……。まあ、そのうち二人はもう予約済みみたいだけだな?』」

そういつて姫路と島田を見ると……。おーおー動揺してる。

「ななななな、何のことかしらね。まああああまったく分からないわ」

「そそそそそ、そうです。予約済みって何でしょうか？それに何で私たちを見るんでしょうね!？」

「ま、あいつはかなり鈍感だぜ？ガンバレ。」

「「そんなことわかってます（る）!!」」

「おい、お前ら。そろそろ本当に作戦会議だ。Dクラスをぶっ潰すぞ。」

「「「「応ッ（はいっ／ええ）!!!!」」」」」

さて、Dクラス戦はどうなることやら・・・

第5話く僕と皆とミーティングく後編（後書き）

どうでしたでしょうか。やっと主人公の能力（？）が決まりましたね。

説明不足感は否めませんが・・・正直チート能力ですよ。

未来予知にスカウターを着けたようなもんです。ところどころで活躍させたいです

作者にヒロイン案を！！ガチです！！どなたかいませんか。

待っております。

感想・アドバイス・評価お待ちしております。

あまりにキツイとガラスハートの作者は死んでしまいますのでご理解を・・・

ではまた次回。

第6話く俺と戦争とDクラスく（前書き）

かなり、遅れました．．．．理由は後書きで。

タイトルが変わったのは、遅いですが主人公の一人称の変化で変えました。

．．．．．小説のタイトルも変えようかな．．．

こうして俺たちFクラスの戦いが始まった。

— — — — side 明久 — — — —

「吉井!! 木下たちが渡り廊下でDクラスと交戦状態に入ったわ!」

そういうながら駆けてくるのはFクラスの数少ない女子(?)の一人こと島田さんだ。こうしてみると全体的にスラッとした体形で背も高く足もきれいなのにどうも魅力に欠ける。なんでだろう?

「ああ、胸か。」

スラッとしすぎてるのもまた……ね？

「あんたの指を折るわ。小指から順に、全部。」

ま、まずい。後ろに阿修羅が見える……ハッ!? そうか!! これが……これがスタンドなのか!!

「また変なこと考えてるでしょ? ……腕も折るわ。」

今度こそマズイ。

「そ、それよりホラ、ま、まずは試召戦争に集中しないと!!」

現在前線に配置されているのは秀吉の部隊。そこから下がったところに僕のいる中堅部隊がいる。いつの間にか部隊長にされてたけど隊長になったからには隊員を導く義務がある。頑張らないと。

まずは戦場の雰囲気を感じよう。さあ、耳を澄ませてよく戦闘の様子を聞き取るんだ。

『さあ来い！！この負け犬どもが！！』

『て、鉄人！？い、いやだ！補習室は嫌ダアアアアア！！』

『捕虜は全員この戦争が終わるまで補習だ！！終戦までどれほどかかるが分かんがここを出たころには趣味が勉強のまじめな学生に更正してやる！！』

『お、鬼イイイイイ！！だ、誰か助け・・・ギャアアアアア！！！！（ボタン！）』

『ふう、お？戦死者か。戦死者はああああ補習うううううううううううう！！！！！！』

『い、いやd・・・ギャアアアアアアアアアア！！！！』

よし、だいたいはわかった・・・

「島田さん。中堅部隊以降の全部隊に通達を。」

「いいけど、なんて？」

「もちろん・・・・・・・・・・・・・・・・総員退避！（キリ）」

「このバカ！！（ズバシュッ！）」

パンチをもらった・・・・・・・・・・・・・・・・チヨキで。

「目がっ！！目があっ！！！！！」

ゴロゴロゴロゴロ・・・あまりの痛さに転がることしかできない。

「あんた部隊長でしょ！目を覚ましなさい！！臆病風に吹かれてどうすんのよ！！！」

「せめてそのセリフはグーかパーで殴って言ってほしかった！！だってその覚ますべき目が見えないんだよ！！？」

「いい？吉井。うちの部隊は木下の部隊の掩護でしょう？あいつらが消耗した点数を稼ぐ時間を与える重要な役割なの。そのウチらが逃げたらどうやってあいつらの時間を稼ぐっていうの？」

島田さんがやけにもっともらしいことを言う。けど、さっきの僕のツツコミはスルーなのかな？

でも、確かに彼女の言うとおりだ。そうだ、僕たちの働き次第でこの戦争を左右するかも知れない大事な役割だ・・・・・・それを僕は補習のペナルティが怖いからって逃げようとしたなんて・・・・・・！！

島田さん！君はなんて男らしいんだ。そこらの男よりよっぽど男らしいよ！！涙が止まらないよ！（あと激痛も）

「何かしら・・・・・・？今吉井を殴らなきゃいけないような気が・・・・・・？」

「ごめん、僕が間違ってた。これからはこの戦争に勝利することだ

けを考えよう！」

「ええ、それに個人で負けているとしても多対一で戦えばいいわ。その通りだ。点数じゃ負けてるけどやり方次第では勝つことだって十分に可能だ。」

「そうだね、よし、やろう！！」

「うん、その意気よ吉井。」

大丈夫、僕ならやれると意気込んでいたところに、伝令係が走ってきた。

雄二と別れた少しあと、Fクラスで俺は姫路と共に回復試験を受けていた。教壇に立つのはわが学園始まって以来の才女と言われる高橋女史・・・・初めて見るな・・・・観察開始・・・・

ふむ、身長162cm。なかなか高いな・・・・体重（自主規制）。ふむ、ノーコメントで。スリーサイズ・・・・ノーコメント。何？ノーコメントばっか？仕方ないだろ、女子のプライベートをそう簡単にさらすわけにはいかないんだよ。決して作者が考えるの面倒だったとかそんなんじゃない。・・・なんか変な電波を受信した？ま、いいか。試験に集中しないと。

「・・・以上が注意になります。よろしいですね？」

おっと、説明してたみたいだ。聞いてなかったが。

「はい。」

と姫路。どれほどのもんなんだろうか。学年トップクラスというのは・・・・

「わかりましたー」

「では、最初は国語です。はじめてください。」

バサッ

カリカリカリ・・・カリカリ↑俺

カカカカカカカカカ！↑姫路

おいおい・・・ほんとに化けもんだな、学年トップクラスは。俺もそこまで低いというわけではないが自信なくすぜ・・・。

「終了です。ペンを追ってください。」

国語終了。その後も淡々と進んでいき・・・。

「では次が最後、保健体育です。」

キターーーーーー!!!!

フフフフフ。人体を観察しつくした俺にとって保健体育などとはやお遊び!!これに関してはムツツリーニとはれるぜ。

「はじめてください。」

カカカカカカカカ!↑姫路

ズバババババババ!!↑俺

フハハハハハハハ!これならば姫路にも後れは取らん!!

「終了です。」

フハハハハハハ………ん？終わりか。ちょっと点数低いな・
……まあ、余計なことをしてたのが悪かったんだけど。

「では、二人とも頑張ってくださいね。」

「「はい！」」

そう言って教室を去る高橋先生。俺は追いかけて声をかけた。

「高橋先生。」

「あら？どうしました吉田君？」

「これを。」

そういつて俺が渡したのは簡単かつ時間を取らないエクササイズの数々。

「これは………?」

「簡単なエクササイズですよ。時間もとりませんから好きな時にできます。先生の悩みを解決するのにうってつけですよ。」

「っ！」

驚く顔をする高橋女史。そりゃそうだ、だっていきなり自分のプライベートをのぞかれたに等しいんだから。でも、俺はトレーナーとして見過ごすことはできないんだ。

「迷惑でしたらすいません。」

「いえ、ではありがたく受け取らせていただきます。では。」

そういて去っていく高橋女史………驚いたな、だいたいの人は初見で渡しても突き返すかうさん臭そうな目しか向けない。でも、あの人はそんなことなく目を通し、感謝までしてくれた。すごい人だ。俺自身こんなことをされたら突き返すだろうに……

おっと、惚けてる場合じゃない。戦争に……行くか。

「待たせたな、じゅんびOkだ。」

「ああ、そうか……お疲れだ、守。」

「どうしたんだ？雄二。」

「ちよいと悩んでな．．．．．」

「悩み？」

「ああ、実はな．．．．．」

— — — side 高橋 — — —

ごきげんよう。高橋洋子です。今日はFクラスとDクラスが試召戦

争をするというので回復試験の監督としてFクラスにきています。開始早々試験を受けるのはやはり、振り分け試験を欠席した吉田守君と姫路瑞希さんでしょう。姫路さんとはともかく、吉田君は面識がないのでちょっとドキドキしますね。いい子だいいのですが・・・

そんなことを考えてる間にFクラスに着きました。吉田君は・・・悪そうな子ではないですね。

「では、回復試験を行います、カンニングなどの不正行為とみなされる行動をとった場合0点となりますので注意してください。そして、試験は時間の許す限りいくらでも解けます。替えの用紙を申請するのは余裕をもってして下さい。以上が注意になります。よろしいですね？」

私が説明している間、吉田君は微動だにせずにこちらを見ていました。けれど、その視線を感じた途端、少しの不安感が募りました。そう、まさに自分の内側まですべて見られているような、そんな感覚。しかい、それも、私が確認を取ったとたんに消え去りました・・・やはり気のせいだったのでしょうか？

そして、試験が終わりました。吉田君は普通の教科は平均強、Bクラスの中堅並みでしょう。ただ、保健体育のみがずば抜けています。この点数なら、学年のトップクラスに入るでしょう。面白い子です。確か保健体育学年トップの土屋君もこのクラスのはずです……。・ほんとに不思議なクラスです。

「では、二人とも頑張ってくださいね。」

そういつて教室を出ます。すると、吉田君が追いかけてきました。

「高橋先生。」

「あら？ どうしたんですか？ 吉田君。」

呼びかけられたことにビックリしましたが冷静に対応できました。

「これを。」

そう言って吉田くんが差し出したのは数枚の紙？ ってこれは試験の問題用紙ではないですか。終盤何か真剣に書いていると思ったらこれだったのですね。

「これは……。？。」

「簡単なエクササイズですよ。時間もとりませんから好きな時にできます。先生の悩みを解決するのにうってつけですよ。」

「っ！」

驚きです。確かに最近運動不足で体重が増えてきたし、肌も少し・
・という状況です。しかし、誰にも言っていないのに・・・・と
思いつつ見ると私のような知識のない物でもわかるほど、効率のい
いエクササイズでした。速読は得意なんですよ、エヘン。こんなも
のを考えれるなんて彼は何者なんでしょう。親がスポーツトレーナ
ーだと聞いていますからそれですかね？まあ、危ない物ではない
でしょう。そんな私の沈黙をどうとったのかはわからないが、彼は
申し訳なさそうな顔で

「迷惑でしたらすいません。」

と言った。それを聞いた瞬間何でかわからないが口が勝手に動いて
いた。

「いえ、ではありがたく受け取らせていただきます。では。」

そういった自分に驚き、なぜかそんな自分を見られなくなかったの
で、すぐに踵を返して職員室に向かいました。

エクササイズ・・・始めてみましょうか。

第6話く俺と戦争とDクラスく（後書き）

さて、ということですね。理由の説明おぼ。まず

体育祭・・・練習や応援団でくたくた・・・

←

風邪・・・やっちゃったZE☆

←

定期テスト・・・おおふ・・・

←

現在に至ると・・・

風邪がなければあげてたんですが・・・はい、わかっています。言い訳です。

しょうがないじゃないですか！！テスト勉強とか！！

・・・あまり点はよくなかったけど。

アッ！やめて、石投げないで！！ということですいませんでした。

そうそう、ヒロインがだいたい固まりかけてます。

秀吉、優子、友香（小山）、高橋先生あたり・・・かな？小暮先輩とか迷ってます。

今回の高橋先生もその関係です。絡ませ方が下手すぎる・・・

・ o r z

こんな作者ですが、頑張ります。

感想、アドバイス待ってます。

第7話く俺と戦争とDクラス2く（前書き）

これで、休んでた時の分勘弁してください．．．．．

本編どうぞく

第7話く俺と戦争とDクラス2く

— — — side 明久 — — —

報告係の人がやってきた。

「島田！吉井！前線部隊が撤退を開始したぞ！！」

「総員退避よ！！」

・・・あれ？さっきと言ってることが違うような？

「吉井、問題ないわよね？」

問題だらけの気がするが気のせいだろう。うん。

「そうだね、逃げよう。僕らには荷が重すぎた。」

「そうよね。ウチらは精一杯努力したわ。」

Fクラスへと方向転換・・・したところで、Fクラスに配備されて
いた横田くんが目の前に。

「ん？横田じゃない、どうしたの？」

「代表より連絡があります！！」

メモを見ながらはきはきとしゃべる横田君。

「『逃げたらクロス』」

「「総員突撃しろー（よ）！！」」

気が付けば島田さんと共に戦場へ向けて全力ダッシュ。これもFクラスの勝利を思ってたのこさ。

と、前方からこちらへ向かって走ってくる美少女を発見。

「明久、島田！助けに来てくれたんじゃな！」

ああ、なんだ秀吉か、いつ見ても可愛い・・・

「秀吉、大丈夫？」

「戦死は免れておるが点数を削られてヘトヘトじゃ。これ以上の戦闘は無理じゃな。」

「そっか、じゃあ早く戻ってテストを受けてこないと。」

「そうじゃな。全教科は無理じゃろうが、1・2教科は受けてくるとうしょうかの。」

言うや否や秀吉と前線部隊の人たちはFクラスへと走って行った。出陣した時より少ないのは補習室にいるからだろう・・・

・・・南無。

「よし、彼らの分も時間を稼ぐぞ！」

そういつて戦場へと向かった僕ら。

「吉井！見て！！やつら五十嵐先生と布施先生を引っ張ってきたわ。」

なるほど、学年主任だけじゃ時間がかかるから立会人を増やしたってことか。

「島田さん。科学の点数は？」

「自信なし。60点台常連よ。」

さすがFクラス。いい点とは言えないね。

「わかった。じゃああの二人を回避しながら進もう。」

目立たないように隅に向かい、体を小さくしながらこっそり進む。
気分は某蛇大佐。見るがいい、これが中堅部隊隊長と副隊長の勇姿だ！！

「あっ、そこにいるのは美波お姉さま！？五十嵐先生、こっちへ来てください！！」

「美晴！？くっぬかったわ。」

島田さんがDクラスに見つかった。このままだと二人とも戦死は免れない。……………仕方ないな。

「よし。島田さん。ここは君に任せて僕は先に行くよ。」

「なっ！？そこは『ここは僕に任せて先に行け！！』でしょ！？」

「そんなセリフ・・・・・・・・リアルじゃ通用しない！」

「吉井！このゲス野郎！！」

「お姉さま！逃がしません！！」

「美晴・・・・・・・・やるしかないってことね・・・・・・・・」

先生からは十分に離れて島田さんの様子をうかがう。相手の子は召喚獣呼び出し、島田さんもそれにこたえるように召喚を開始した。

「試験召喚っ！^{サモン}」

その呼び声に応えて足元に幾何学模様が浮かび上がり、そこから姿を現す召喚獣。

その召喚獣は軍服にサーベルを持っていることを除けば身長80CMぐらいの『デフォルメされた島田美波』そのもの。

向こうも同じようにデフォルメされた自身の分身を従えている。

「お姉さまに捨てられて以来・・・・・・・・美晴はこの時を一日千秋の想いで待っていました・・・・・・・・」

「いい加減ウチのことは諦めなさいよ！！」

いよいよ戦闘が始まると思うと全身に震えが走る・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・んだけど・・・・・・・・

「島田さん！真正面からぶつかったら点数の低いこちらが不利だ！」

「わかってるわよ！でも、細かい動作は難しいのよ！」

直後、力負けした島田さんの召喚獣の獲物が吹っ飛ぶ。

『Fクラス 島田美波』

化学 53点

『Dクラス 清水美晴』

化学 94点

・・・島田さん、サバ呼んでたな。60にも行ってないじゃないか。

「さ、お姉さま。勝負はつきましたね？」

「い、いやあっ！補習室はいやあっ！！！」

「補習室？・・・フフフッ♪」

楽しそうに笑いながら清水さんは島田さんの手を引っ張っていく。
・・・あれ？そっちにあるのは保健室だよ？

「さあお姉さま？今ならベッドは空いていますよ？」

「よ、吉井！フォローを！！いまのウチは補習室送りよりも危ない気がするの！！」

そうだろうね、僕もそう思うよ、でも……………

「殺します…………美晴とお姉さまの邪魔をする者は殺します……………」

僕にそこへ突っ込む勇氣はない。

「島田さん！君のことは忘れない！！」

「吉井！！なんで戦う前から別れに台詞を！？」

「邪魔者は殺しますっ！」

島田さんの召喚獣を動けなくすると、今度はこっちに向かってきたあ！？

「吉井！助太刀するぞ！！」

「この声は…………須川君！！君が救世主に見えるよ！」

『Fクラス 須川亮』

化学 76点

『Dクラス 清水美晴』

化学 41点

須川君の召喚獣が敵をたたききる。おお、須川君の勝利だ！さっきの戦闘で点数が減っていたのが幸いしたな」

「島田、大丈夫か？」

「ええ、大丈夫。……補習の鉄じ……じゃない、西村先生。この危険人物を早く補習室へ」

「おお、清水か。たつぷりと勉強漬けにしてやろう。こっちに来い。」

こうして、清水さんは補習室へと連行された……

「お、お姉さま！美晴は諦めませんから！このまま無事に卒業できると思わないでください！！」

……とても危険な捨て台詞を残しながら……

ふう、いろんな意味で危ない戦いだった。

「吉井。」

「島田さん、お疲れ。とりあえずいったん戻って化学のテストを受けてくるといいよ。」

「吉井。」

「さ、須川君、行こう。戦争はまだまだこれからだ！」

「吉井いいっ！！！！」

「は、はいっ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ウチを見捨てたわね？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・記憶にございません。」

流石は戦場、スゴイ殺気だ・・・・・・・・主に後ろの島田さんから。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

しばし沈黙・・・・・・・・すごく居心地が悪い。

「死になさい吉井明久！！試験召――――^{サモ}――

「誰か！！島田さんが錯乱した！！本陣に連行を！」

「どうした！？吉井？」

おお、須川君。君は僕のピンチをことごとく助けてくれる・・・・・・・・・・
・・まさにメシアだよ。

「島田！落ち着け！吉井隊長は味方だぞ！！！」

「違うわ！こいつは敵！！ウチの最大の敵なんだからあっ！！！！」

ひ、否定できない。

「す、須川君。ヨロシク。」

「わかった。」

そういつて須川君が島田さんを連行してくれた。助かった……。・あの怨念のこもった目だけで殺されそうだったよ。ひとまず身の安全を確保だ。

「秀吉たちが補給を終えるまで、前線を維持するんだ！ 一歩も進ませるな！！」

さあ！ここが僕らの正念場だ！！

現在俺は雄二と作戦会議中だ。何でも、悩んでいることがあるらしい。

「で？何なんだ？悩みつつのは。」

「ほかでもない。立会の教師のことだ。人数を減らしたいんだが……」

「なんだ、簡単じゃねえか。」

「違う。……減らしつつも、明久を追い詰めたい。」

「なるほど……それは多少悩むな……」

考えてる間に島田と須川が入ってきた。っておいおい……島田のキレッぷりが半端ねえぞ、おい。

「吉井イツ！ゼツツツツタイに許さないんだから！！」

あのバカ……また何かやったな？……ん
？……ハハッ、今のことは全く関係ねえが思いついたぞ……

「雄二。」

「なんだ……ってその顔は……思いついたか（ニヤリ）」

「ああ。（ニヤリ）それにこれならば味方の士気を上げることまで可能だ。」

「聞かせろ。」

「ああ。（ボソボソ……）」

「ッ！……なるほど、素晴らしい作戦だ。俺では思いつかなかった。さすがだ、守。」

「へっ、こんな案採用してくれるとは……器がでかいねえ代表様？」

「フッ」

「ハッ」

ガシィっ！！！！

その日、俺たちは魂で通じ合った。

「じゃ、早速だな。おい、須川あ！」

「なんだ？ 吉田？」

「いや、これを全校放送で流してほしいんだわ。」

そういつて計画を書いた紙を渡す。

「これは……わかった。必ず成功させよう。」

そういつて教室を後にする須川。俺と雄二、言いたいことは同じ。

「頼んだぞ。」

様々な想いを乗せた俺たちの言葉に須川は一言

「ああ、行ってくる。」

そう答えた背中はとてもかっこいい物だった。

第7話く俺と戦争とDクラス2く（後書き）

感想、アドバイスお待ちしております。

では、また次回。アデュー（ハ－ハ）／

第8話く俺と戦争とDクラス3く（前書き）

またもや、長期間空いてしまいました。

本当に申し訳なく思っております。m（　　）m

でわ、本編をどうぞく

第8話く俺と戦争とDクラス3く

――――side明久――――

戦争中だ。僕は指揮官として、みんなからの報告を聞いている。

「吉井隊長！横溝がやられた！布施先生側はあと二人だぞ！！」

「五十嵐先生側には今俺しかない！援軍を頼む！！」

「藤堂の召喚獣が危ない！助けてやってくれ！」

聞こえてくるのは悪い知らせばかり。くっ、想像以上に劣勢だ。

本陣から応援が欲しいけど、そんなことをしたら作戦に支障が出る。
ここは僕たちだけで持たせるしかない！！

「布施先生側は防御に専念！五十嵐先生側は、総合科目の人と交代しながら効率的に勝負するんだ！藤堂君は諦めよう！！」

僕が一息に指示を出した瞬間、場の空気が凍った。

『おい、聞いたか？』

『ああ、ばっちな。』

『まさか、あの吉井がな……』

『ああ．．．．』

『”効率的”なんて言葉を知っているとは．．．．』

「ちくしょうっ！皆なんてキライだっ！！」

みんな揃ってボクをバカにして！！．．．．．違っよ！これは朝食べた塩水が（食べるとは言わんぞby雄二）目から出ているだけさっ！

「と、ともかく皆！よろしく。」

「「「「了解！！」」」」

よかった．．．．一応隊長として認めて、指示に従ってくれているみたいだ。

「Fクラスめ、何を狙ってるんだ？」

「明らかに時間稼ぎだぞ？」

「何かを待っているのか！」

しまった！僕らの作戦が気づかれかけている。さらにやりずらくなるな．．．．．

「た、大変だ！！Fクラスが世界史の田中を呼んだとの報告が！！」

「何！！！？世界史の田中だと！？」

「Fクラスめ！長期戦に持ち込む気か！？」

ちっ田中教諭が見つかったか。

田中教諭は初老のおっとりとした男性で、採点に結構時間がかかる。だから長期戦目的の僕らにとっては都合がいい。

「吉井、Dクラスは数学の木内先生きのうちを連れ出したぞ！」

須川君だ、さっき本陣に戻った時に情報を仕入れてくれたんだろう。木内先生は、田中先生とは対照的に、採点が厳しいが、早い。Dクラスは短期決戦を望んでいるようだ……

でも、僕らは破られるわけにはいかない。僕らの任務は学校の授業が終わるまで、戦線を維持することだからだ。

悩んでいた僕に、救いの手が差し伸べられた……

「吉井、俺が偽情報を流して先生を減らしてくる！」

「す、須川君……なるほど、その手があった。よし！たのなんだよ！！須川君！！」

「ああ、任せろ。」

そういつて須川君は駆け足でこの場を離れて行った・・・妙に
活き活きとしながら・・・

まあ僕は指揮官として後方から指示を出そう！・・・
・・・補習室が怖いわけじゃないからね！ホントダヨ？

この時僕は気づいておくべきだった、まさかこの件があんなことになるなんて・・・・・・・・・・

「くそっしぶといな！」

「今、船越先生を呼んだ！もうすぐだ！！」

くそっマズイ・・・・・・・・早くしてくれ須川君・・・・・・・・

（side 守）

須川が去ってしばらく何の音沙汰もなかった。

「あいつ、失敗したか？」

「いや、もう少し待ってよう。」

その時、教室に音もなく舞い降りた男が一人。

「ムツツリーニか、どうしたんだ？」

雄二が問うと、ムツツリーニは話し出した。

「……敵は数学教師を用いて短期決戦に持ち込もうとしてる……」

「くっマズイな、あいつらが持つか？ 須川、急いでくれ……」

ピンポンパンポン

「「きたあっ！！！！！！」」

俺たちは顔がにやけるのを止められなかった……

side 明久

ピンポンパンポン

「きたあつ!!!」

待ってたよ! 須川君!!! これでかなり楽に……………

『船越先生、吉井明久君が校舎裏で呼んでいます。』

……………あれ?

『生徒と教師の垣根を越えた大事な話があるそうです。至急向かってください。繰り返します……………』

……………あれええええええ!!!?

須川君、わかってる!?! 相手はあの船越女史だよ!?!? (ちなみに45歳) 婚期を逃しすぎて単位を盾に交際を迫るあの船越女史だよ!!!?

僕が行くまで絶対校舎裏で待ってくれてるだろうけど、その分僕の貞操が大変なことにいいいい!!

「吉井隊長・・・・・・・・・・あんたあ漢だよ!!」

「ああ・・・・・・・・まさかクラスのためにそこまでしてくれるなんて・・・・・・・・」

仲間たちが感激した様子で握手を求めてくる。

やめて!! 戦場にいい影響を与えないで!!

『おい、Fクラスの奴ら本気で勝ちに来てろぞ・・・・・・・・あんな犠牲すらいとわないとは・・・・・・・・』

『ああ・・・・・・・・すさまじいな・・・・・・・・』

『あそこまでの意思を持っている奴らに勝てるのか・・・・・・・・?』

Dクラスにまで! もういやあぁっ!!

「皆、吉井隊長の死を無駄にするな!! 絶対に勝つぞ!!」

「「「おおおおおーっ!!」」」

味方の士気も上がっちゃったし・・・・・・・・これじゃ否定しづらいじゃないか!

「隊長！行けますよ！！この勢いで押し返しましょう！！」

畜生、こうなった原因はなんだ？・・・・・・・・・・・・・・・・
・そうか、奴か。

「・・・・・・・・す」

「す？」

「須川ああああああああああ！！！！」

この日、僕の恨み手帳にまた新たな名が加わった。

｝side守｝

戦争が開始されてからかなりの時間がたった。もうそろそろ授業が終わる。その意味するところはただ一つ。

反撃、開始だ。

「よし、みんな補充試験は済ませたな？ 明久たちが持たせてくれた前線に今より特攻をかける！！狙うはDクラス代表の首だ！行くぞ、皆！！」

「「「「「うおおおおおおお!!!」」」」」」

雄二の激励に全員が気合のこもった返事を返す。すさまじい気迫だ。

さて、俺も与えられた仕事をこなしますか。

「よし、行くぞ姫路。」

「は、はい!」

そういった姫路は肩は張ってるわ、手は震えてるわでどうしようもないな。

「落ち着け。初戦争で緊張するのもわかるがそんなに固まると本来の実力が出せんぞ? 気楽に行け。」

「そ、そうですね。」

「それにだ、何のために俺がわざわざ一緒についていくと思ってるんだ?」

「そうですね! よろしくお願いします。吉田君。」

「おお。んじゃ、行くか。」

「はいっ!」

いい感じに緊張はほぐれたみたいだな。よかったよかった。

side 明久

「工藤信也、戦死!!」

「西村雄一郎、総合残り40点!!」

「森川が戻らない!! やられたのか!？」

戦うことしばし、残念ながら戦力差が表れ始め、次々と悪い情報ばかりが飛び込んでくる。さらに、工藤君と森川君がやられたことによつて僕の隊は残り5名。いよいよ厳しい状況だ。そろそろ限界だろうか。(僕 of 精神衛生的にも)

「明久あつ!、あと少し持ちこたえろ!!」

撤退を考えていた矢先、聞きなれた声で檄が飛んできた。声のほうを向くと、やっぱり雄二だ。援軍もつれている!!

「援軍だ! 合流される前に隊を壊滅させろ!!」

Dクラス代表の平賀君の声。っていうかまずい、合流する前に全滅なんてさせられたら、補修室行きじゃないか!!

「西村雄一郎、戦死!!」

残り4名。マズイ。

「五十嵐先生、Dクラス鈴木が召喚します。」

「くっ、Fクラス田中も行きます。」

田中君が捕まったか!

Dクラス 鈴木一郎

化学 92点

V S

Fクラス 田中明

化学 67点

刀で一刀両断される田中君の召喚獣。

これで残り3人か!! マズイマズイマジマズイ!!!

向こうはココが正念場だと感じ取ったのか、戦死を恐れずに突っ込んでくる。

柴崎君が鈴木君を倒したが、次の召喚獣が迫っている。疲弊した柴崎君では無理だ! 僕が出るしかない。

Dクラスの笹島君が召喚獣を伴って、突っ込んでくる。立ち位置的に、召喚範囲内だから、応戦しないと補修室送りだ。

仕方がない。

「吉井明久！その首もらったああああ！！！」

やるしかない！

大きく息を吸って気合を入れる。

「負けてたまるかああああ！！！」

敵が突っ込んでくるのに合わせて、僕はあの言葉を叫ぶ。

「試験召喚獣召喚……試験^{サモン}召喚ッ……！」

第8話く俺と戦争とDクラス3く（後書き）

どうでしたでしょうか。感想、指摘バッチコイですのでよろしくお願ひします。

さて、今回の理由は・・・・・・・・・・二大学園行事の一つ！
文化祭だああああ！！

ええ、文化祭執行委員として奔走してました。かなりキツイッス。

まあ、これであらかた行事は終わったので、また一週間一話投稿ぐらいには戻せるかと。

まあ、気分で結構変わります。作者気分家なんで。まあまた、行事など（おもにテスト）がある場合は一応活動報告に載せときますのでく

ではまた次回。

（^^）ノシ

第9話　俺と戦争とDクラス4　（前書き）

ちよつとやるき出しました。結構きついです。

もうこのペースはむりポ

まあ、とにかくどうぞ

第9話く俺と戦争とDクラス4く

くside明久く

「試験召喚ッ!!」
サモン

叫んだ途端、僕の足元に広がる魔法陣。そしてそこから現れる特攻服に身を包んだもう一人の僕。

「Fクラス中堅部隊隊長吉井明久! 貴公の相手を……………」
ウグフツ!!!!」

いきなり、肩への激痛が! このバカ!! なんでわざわざ敵の進路に出てくるんだ!!!! 痛みにフィードバックって結構つらいんだぞ! ?

「…………この部隊長は『バカ』だ! ここは俺一人に任せろ! 皆は残りを!!」

何か失礼なことを言われてるし! 違うもんね!! これは召喚場所が悪かっただけさ!!

「くたばれ吉井!!」

そういつて召喚獣を突っ込ませてきた! だけど!!

「そうはいくかつ」

低い体勢からそのまま横っ飛び。そして…………

ひょいっ

相手の召喚獣にタイミングを合わせて、足をかける

「なっ!?!」

あっけなく転ぶ笹島君の召喚獣。

よし! 相手が驚いている今がチャンスだ!!

「ああっ! 霧島さんのスカートがめくれてる!!」

Dクラスの背後を指す。

「「「「なにいつ!」」」」」

一斉に振り返る皆。

すごい・・・さすがはAクラス代表。

学年主席で才色兼備。きりしましゅうこ霧島翔子さんDクラスだけでなく、Fクラスの男子、果てには女子も振り向いている。

・・・女子の皆さんは男子に興味を持とうよ。せっかくの共学なのに・・・まあ、霧島さんは女の子が好きみたいだからいいけどさ。

そんなことを考えながらも、僕は行動を止めない。皆の注意がそれた今、その隙を利用して窓ガラスに靴を投げつける!

ガッシャアアアアン!!

粉々に碎け散る窓。

『な、なんだ!?!なにがあった?』

よし、皆の注意がさらにそれた!いける!!

「うわっ、島田さん!!そんなものをどうする気!?!」

今後の保身のためにも一芝居打ちながら、壁の消火器をつかみ、安全弁を引き抜きそして……

ブシャアアアアア!!

あふれ出る消火器の粉末。

「う、うわっ!なんだ?」

「こ、これ消火器の粉じゃねえか!!」

「くそっ、前が見えない!」

これで視界はさえぎった。戦闘続行は困難だろう。

「島田さん!君はなんてことを!」

念を入れてもう一芝居。これで皆島田さんが犯人だと思ってくれ
はすだ。

「Fクラスの島田か!! なんて卑怯な野郎だ!!」

「彼女にしたくないランキングに載せてやる!!」

「でも、男らしくて素敵…………お姉さま…………」

……………なんだか骨の1. 2本じゃすまないような気がする…………

島田さん！君の犠牲は無駄にはしない！！！！

尊い犠牲に黙とうを捧げた後、振り返ると雄二たちがすぐそこまで来ていた。よし、これで合流できる！

「だらあぁっ！」

空になった消火器を投げあげ、スプリンクラーに当てる。これで・
・・・

シュワアアアアア

スプリンクラーが作動。まっていた粉を落とし始める。そしてそこに飛び込んでくる人影。

「待たせたな、吉井！五十嵐先生！Fクラス近藤吉宗が行きます！
！」

間違いない。Fクラス本隊のうちの一人、近藤君だ！

『試験召喚ッ！！』
サモン

Dクラス 中野健太

化学 43点

VS

Fクラス 近藤吉宗

「くっ！ここは退くぞ！全員遅れるな！！」

敵部隊長である塚本君の声が聞こえてきた。それと共に退いていくDクラスの人達。

「深追いはするな。俺たちも明久たちを回収後、いったん戻るぞ。」

これはうちの代表雄二の声だ。おそらく、追って行って敵の本隊が出てくるのを嫌ったからだろう。そうでなければ高笑いしながら追撃を容赦なくかける男だから・・・・・・

「さて、無事か？明久。」

「まあ、なんとかね。」

とにかくこれで一段落。窮地を脱することができた。

僕らは部隊を立て直すため、戦場を後にした・・・

教室に戻り、化学のテストを受けた後、

「明久、よくやった。」

我らがクラス代表からこんな言葉が送られてきた。

「ああ、さすが明久だ。すごかったぞ。」

こちらは転校生からだ。こんなに僕をほめるなんてどうしたんだろう？

そこで気づいた。雄二がムカつくくらいに晴れやかな顔を浮かべ、
守がニヤニヤしながらこっちを見ているのを。

さてはこいつら……………

「さっきの校内放送……………聞こえてた？」

「ああ。」

と雄二。

「ばっちりな。」

と守。息ぴったりだ。っていうより、僕的不幸を喜んでやがる！許せん！！

だが、今の僕は雄二ごときに構っている暇はない。まず肅清を加えなければならぬ奴がいるのだから。

「雄二、守。須川君がどこにいるか知らない？」

「ん？知らんが、須川になんか用なのか？明久。」

「いや、別に用事って程じゃないんだけど……………守は？」

「すまん。俺も知らんぞ。」

「そっか。」

ああ、どこにいるんだろう愛しい須川君。隠れている可能性もあるが、その時は草の根を分けてでも探し出す！

「須川ならもうすぐ帰ってくるんじゃないか？」

高石君による嬉しい情報。もうすぐ帰ってきてくれるのか。心臓の鼓動が早くなって止まらないよ。

・・・よし、落ちつけ僕。包丁は家庭科室からパクってきたし、靴下に砂もちゃんと詰めた。

「殺れる、僕なら殺れる・・・」

「殺るなっの。」

雄二が何か言っているけど、どうでもいい！！

「ちなみに、あれを指示したのは・・・」

ええい！！うるさいな雄二！今の僕の最優先事項は・・・

「「俺たちだ」」

こいつらだあああああ！！！！！！

「シャアアアアアアア！！！！！！」

左手の包丁は致命傷になりやすい肝臓へ、右手の即席ブラックジャックは守の頭上へと・・・・・・・・

「「あ、船越先生」」

「チイイツ!!」

今は僕の貞操のほう的大事だ!撤退!!

side 守

明久が教室に帰ってきた。ヤバい。顔がにやけるのを止められない。隣の雄二を見ると、あいつも同じようだな。

そのまま眺めていると、何かに感ずいたのか、少しイラッとしながら

「校内放送・・・聞いてた？」

と、聞いてきた。俺と雄二は、特にお互いを見たりはしなかったが、

「ああ。」

と雄二。

「ばっちな。」

と、俺。みごとなコンビネーションだぜ。

一瞬、明久がこっちに向かってくるかと思ったが、何とか踏みとどまったらしい。大方、犯人を須川だとも思っているのだろう。バカめ。

まあいい。もう少し様子見と行こう。

「雄二、守。須川君がどこにいるか知らない？」

やはり須川が犯人だと思っているのか。雄二もわかったようで

「ん？知らんが、須川になんか用なのか？明久。」

「いや、別に用事って程じゃあないんだけど・・・守は？」

「いや、俺も知らんぞ。」

努めて平静を装って返事をする。

「そっか。」

お、明久がだんだん限界に近づいてきたぞ……. と思ったらいきなり包丁と砂のズッシリ詰まった靴下を取り出しやがった。おいおい、顔が軽く狂ったやつの顔をしてるぞ。

「殺れる、僕なら殺れる…….」

軽いホラーだな、おい。

「殺るなっの。」

雄二のツツコミも聞こえていないようだ……. そろそろか？

雄二にアイコンタクトを送る。

うなずく雄二。

「ちなみに、あれを指示したのは。」

息を吸って一言。

「俺たちだ。」

その瞬間、明久がこちらに振り向き、包丁とブラックジャック（？）

を持って襲いかかってきた。コワッ

が、対処法は考案済み。

「「あ、船越先生」」

「チイッ!!」

やはり効果はてきめんだ。明久は神速でロッカーに飛び込んだ。やはりバカだな。実際にいるわけがないだろうに・・・・・・

さて、そろそろ決着^{けり}を付けますか。

第9話〜俺と戦争とDクラス4〜（後書き）

感想、アドバイスお待ちしております。

さて、ちょっと聞きたいのですが、この話を更新する際、30000〜50000文字で週一更新をしたほうがいいか、20000〜30000弱くらいで、週2・3回投稿にすべきか悩んでいます。

こうしたらいいんじゃない、こうしてほしいというのがあればよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8090w/>

僕とバカとFクラス

2011年11月8日20時05分発行